

「現場」に出ると必ず何か教えられることがある。

それは仕事の進め方であり、道具の使い方であり、自分の律し方でもある。

「なんでももう少し丁寧に組付できなかったのだろう」とか「なぜもう少し落ち着いて安全なやり方を選択出来なかったのだろう」とか「作業者には安全、安全、落ち着いて丁寧な仕事とを言いながら自分が全然出来てないじゃないか!」とたいていの場合反省する事が多く、そんな時は自分の内部に「批判者」がいてチクリチクリと自分を攻撃する。

連戦連戦のハードワークの時は体力も落ちてくるので、反省して次に生かすべきところで単に後悔しているだけの自分がいたりする。

しかしそういう自分に対面できることも「現場」のよさであり、技術、品質、より良い道具で安全作業を追求するテクアの強さにどこかで結びついていると思う。どんないい本や研修でも決して得られない何か現場には沢山埋まっている。

「疲れない? もっと気楽にやったら?」とよく言われるが、人が思っている程本人は疲れてはいない。

なぜなら、「内部の批判者」よりも「内部の応援者」の方が多いからである。

土、日の朝トントンと事務所の階段を駆け上がり扉を開けるとまるで人間山脈のようにどっしりと構えてそびえ立ち、かん高い笑い声を下界に降り注いでくれるタカスさんがいる。(いつも社内のムードを盛り上げてくれてありがとうございます。)

右を見るといつもニッコリとした笑顔で「おはようございます!!」と気持ちのいい挨拶で出迎えてくれる中山さんがいる。(いつもテクアのことを熱く語ってくれてありがとうございます。)

左を見ると今日はどのホッパーに突撃しようかと手ぐすね引いている誇らしい表情の山下さんがいる。

(社員はみんなホッパーマンと呼んで慕っています。)

みんなの無言の仕草や表情に自分がどれだけ励まされ、後押しされているか……。心の中で「ありがとう」ととなえて現場に飛び出す。

先日の三沢さんには頭が下がりました。現場に穴を空けたくない38度の熱を押しつけて会社に来て仕事をやり遂げてくれました。(三沢さんムチャクチャです。次からは必ず休んで下さい。)

クールな外見に熱い内面が三沢さんの持ち味。

大原さんが亡くなった夜の三沢さんの号泣は自分には一生忘れられない思い出です。

多くの内面の応援者(私の師)に支えられて今日も精一杯突っ走る出来の悪い自分がいます。

感謝!!

【羽原 篤史】



